

## 中世法然伝における対外観

東海林 良昌

### はじめに

法然はなぜ尊いのか。あまりにも自明の事であり、その答えに私たちは窮してしまう。もちろん、浄土宗を開宗した、称名念仏の教えを広めた等、様々な理由が挙げられるであろう。しかし、それは法然が世に知られるようになってから、八〇〇年以上かけて形成されてきた延長線上で、私たちが口になっているにすぎない。法然と実際に対面した者や、人から伝え聞いた者の話が書物にまとめられ、絵画として描かれるようになる。それを目にした者は感銘を受け、その感銘を他の者に伝える。ある者はその思想に触発されて、新たな自らの思想の局面を開拓していく。それら諸要素の世代を超えた総和が、法然上人に対する評価といえよう。

このような、法然の思想や行状についての評価に、もともと影響を与えている表現の一つが伝記である。その中世における伝記は、聖徳太子を除いて、僧侶としてはもつとも多種に及ぶと言われている。

中世における法然伝記の主要なものを紹介すれば、行状の一部を記載している、『玉葉』、『愚管抄』、『明月記』、『三長記』、『吾妻鏡』、『百鍊抄』、『徒然草』、『古今著聞集』、『沙石集』、『平家物語』、『浄土法門源流章』、『私聚百

因縁集』等の日記、歴史書、文学作品類。また、『黒谷上人御灯録』、『拾遺黒谷上人御灯録』、『西方指南抄』、『徹選択集』、『末代念仏授手印』、『明義進行集』等の門流の法語集類。『摧邪輪』、『摧邪輪莊嚴記』、『念仏無間地獄鈔』、『立正安国論』等の門流以外の書籍類。さらに『元亨釈書』、『本朝高僧伝』、『浄土三国仏祖伝集』等の高僧伝類が挙げられる。

また、特に独立した伝記として成立したものに限れば、『法然上人伝記』（『醍醐本』）一卷、『本朝祖師伝記絵詞』（『伝法絵』、『四巻伝』）、『源空上人私日記』一卷（親鸞『西方指南抄』所収、『私日記』）、『法然上人伝』（増上寺本）二巻（残決）、『法然上人絵』（弘願本）四巻（残決）、『法然上人伝法絵』（高田専修寺本）一卷、『法然上人伝法絵流通』一卷（残決）、『知恩伝』二巻、『拾遺古徳伝絵詞』九巻、『法然上人伝絵詞』（林阿本）九巻、『法然上人伝』（『九巻伝』）九巻、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』、『勅修御伝』、『勅伝』）四十八巻、『黒谷源空上人伝』（『十六門記』）、『法然上人伝』（十巻伝）、『正源明義集』九巻等であろう。

これまで法然伝研究は、近代以降の合理的立場から、珠玉の研究蓄積があり、特に中世法然伝については、伝記成立の先後関係や、法然の行状に関する史実について多くの事柄が明らかにされ、現在も学界に新しい話題を提供し続けている。<sup>(1)</sup>しかし、私はこれらの研究史に加え新たな視点を加えることにより、法然伝の豊穡な世界を解明する一助になり得ると考える。それは、これまでの研究史の中で、史実性という焦点化により、現代的な視点から見れば荒唐無稽と思われる事柄は法然伝研究の中では取捨されてきた。<sup>(2)</sup>それにより史実としての法然の行状が明らかにされてきたことは周知のとおりである。

ところが、現代の人々から見ても荒唐無稽であっても、伝記作成時に生きた人々から見れば、彼らにとっては実際に理解可能であり、尊崇すべき重要な事柄でもあったのである。

その観点からすると、現代的な視点から見て、史実であるという事柄と、荒唐無稽と思える事柄をも含めた総体としての法然伝がどのような意味を持ちえたのかについて、明らかにされる必要があると私は考えている。

この問題意識から私は、総体としての諸伝の世界の中で、法然像がどのように変遷してきたのかを明らかにすることを研究課題としており、これまで近世・近代の法然上人像についての論考に取り組んできた。<sup>(3)</sup>

そして、今回は中世法然伝に注目する。ここで明らかにしたいのは、中世法然伝における「対外観」（他国に対する見解）である。言うまでもなく、仏教はインド・中国・朝鮮・日本と伝来してきたのであるが、特に日本仏教においては、仏教伝達の相承性、地政学的な自国の位置から、他国の人師や、経論疏を尊重してきた。この分野における研究の蓄積はすでに歴史学や国文学領域に存している。<sup>(4)</sup> これまでの研究では、教義や為政の問題など、当時の社会的上層部に位置する思想について語られてきた「対外意識」であるが、その裾野はさらに広く想定されて良いと思われる。他国に対する意識は、そのまま自国意識の裏返しであり、他国の文化を参照しながら、自国の文化を逆照射した表現でもあり、当時の思想文化の様々な局面に影響を与えるからである。その文化的な状況の中で、伝記作者に与えられた使命は、いかにして日本仏教の祖師である法然上人の尊崇性を読者に伝えることにあり、そこに法然伝の特質の一つを看取することができよう。これら諸伝に優劣をつけることは困難であるが、かかる視点を持って読み進めていく中で、『四十八巻伝』の特質の解明を思い立ったのである。

『四十八巻伝』は、法然の滅後百年あまり後に製作され、四十八巻という最大の分量を持つ伝記である。それだけに現在の歴史学の分析によれば、史実とは言えない事柄も多く含まれており、それらは取捨されてきた。しかし、近代からさかのぼると、近代前の法然伝といえ、やはり『四十八巻伝』を指すのであり、法然滅後から明治期より前までの六〇〇年間にわたり影響を持ち、現在も浄土宗内のみならず、法然伝の基本資料としての地位を譲らな

い、伝記としての総合力を保っていることは、諸人の認めるところであろう。

そこで本稿では、かかる問題意識により、中世法然諸伝において対外観を示す事柄を取り上げ、それらを比較しながら祖師に対する評価の特質を明らかにしたいと考えている。

## 一 他国の優位性

ここからは、諸伝における対外観をもとにした法然評価の三つの型について考察を行う。即ち一つには他国優位型、二つには自国優位型、三つには超地理的優位型である。まず一つ目の他国優位型について述べる。この他国優位型は、相対的に他国の優位性を認めながら、他国の文化と同一の品格を保つ故に自国の優位性を示す評価である。その典型的な表現が、浄土五祖について述べられた箇所である。例えば、『九卷伝』には、

上人 五祖類衆伝といふ書を造て 震旦国の念仏の祖師 曇鸞 道綽 善導 懷感 少康等の五師の徳をあらはし給へり<sup>⑤</sup>

と、所謂ここでは浄土五祖について述べられている。これは、重源が宋に渡り、五祖像を持ち帰ったことを述べるくだりであるが、九卷伝では『浄土五祖類衆伝』を述作したことのみが指摘されている。ところが『四十八卷伝』になると、

震旦に 浄土の法門をのふる人おほしといへとも 上人唐宋二代の高僧伝の中より 曇鸞 道綽 善導 懷感 少康の五師をぬきいてて 一宗の相承をたて給へり<sup>⑥</sup>

と、浄土宗が他の教団と同じような師資相承の無いことを批判されることに対し、他国の優れた浄土宗祖師からの

相承を述べることにより、浄土宗の正統性と法然の尊貴性を明かしている。

このような表現は、他の場面にも見られる。例えば、法然九歳時といわれると父時国との別れの場面である。例えば、『四十八巻伝』では、

時国ふかき疵をかぶりて死門にのぞむとき、九歳の小児にむかひていはく、「汝さらに会稽の恥をおもひ、敵人を恨むる事なかれ、これ、ひとえに先世の宿業なり。もし遺恨をむすばば、そのあだ、世々につきかたるべし。しかじはやく俗をのがれ、家を出で、我菩提をとぶらひ、みづからが、解脱を求むには」といひて、端座して西にむかひ、合掌して仏を念じ、眠るがごとくして息絶にけり。<sup>⑦</sup>

と、敵の夜討に遇い重傷を負い臨終の時国が、幼いわが子、勢至丸（後の法然）に、あだ討ちをすることなく私の菩提を弔い僧侶になるべきことを遺言し、居住まいを正して西に向かい合掌して仏を念じながら息絶えると言う話が展開される。ここでは、「会稽の恥をおもひ」と、『史記』の事例を挙げ武門の家の長としての漢籍の教養が述べられるのであるが、『四巻伝』では、

梵網心地戒品に云　みつからもころし人ををしへてもころし　ころすをもほめ　殺すをみても随喜し　乃至呪してもころす　因縁報果　みなころすにおなし　よの九戒　又又如此　然者一向に往生極楽をいのりて　自他平等利益をおもうへし　といひおわりて　心をたたしくして　西方界にむかひて高声に念仏して　ねむるかこ　とくしておはりぬ<sup>⑧</sup>

と、父時国は梵網経の一節を示して、他を殺害することの罪惡について触れ、往生極楽を祈り、自他平等利益を思うのが良いと、仇討ちの不要のみならず具体的に浄土門への帰入を勧める内容となっている。これは『九巻伝』にも見られ、

昔教主釈尊も頭痛背痛との給ふ 曠劫の殺罪 仏果になほ余殃あり 一念の怨心聖賢其障礙を恐る 今生の妄縁を捨て 将来の宿報をつく事なかれ 梵王の四等を行する 慈心を最とす 世尊の十重をとき給ふ殺生を初に禁しむ<sup>(9)</sup>

と、ここで時国は、釈尊も在世中に身体的な苦痛は前世の因縁によると述べたとし、釈尊でさえ前世の因縁が残っていたのであり、世にある聖賢もその障害になる殺罪をおそれるのである。そうであるから宿報作ることないやうにと述べている。また死後梵天に生まれるための功德を持つ行としての四無量心（慈・悲・喜・捨）にも、慈を説いており、『梵網經』の十重禁戒（殺戒・盜戒・淫戒・妄語戒・酤酒戒・說過戒・自讚毀他戒・故慳戒・故瞋戒・謗三宝戒）でも、第一に殺を戒めているではないかと、仏教学の知識を披露することである。これは法然の父である時国が、仏教的世界においてもつとも価値を持つ、印度の仏説を披露することで、法然の尊崇性を示しているのである。これら、時国の仏教学的な知識の披露の場面は、『四十八巻伝』では採用されていない。

それが、より顕著にその採用不採用が現れているのが、ご降誕の場面である。二幡が生家に生える棕の木に掛かるという奇瑞が見られたことを述べるのであるが、『弘願本』では、

如来滅後二千八十二歳 日本国入王七十五代崇徳院長承二年美作国（中略）いのりもうけたる子はみなた人にあらず 勝尾の勝如 横川の源信僧都みな母これを祈りてまうけたる也 この上人も観音のあたへ給へる子なるかゆへに かくたうとき人なりけり 仏菩薩の衆生を利益し給事も時にしたかひ 機をはかるゆへに 釈迦如来出世し給て のち正法千年もすき 像法またすきて末法ひさしくなりぬれば 顕教もさとり人なく密教も行ずる人まれなり これによりて上人さとりやすき念仏をひろめて 衆生を利益せんかために この浄土宗を建立し給へり<sup>(10)</sup>

と、仏神に祈って出生した子供は常人にはない優れた特質を有しているとし、勝如<sup>①</sup>や源信のような、日本における中古の名僧も母が祈って出生した人物であるとし、法然も同様なので尊いとしている。しかし、ここで注目したいのは、法然の出生に関わる先行善例との相似以外に具体的な評価すべき点として、釈尊が世に出て長い時間が過ぎ、末法に突入したが、顕教で悟る人もなく、密教を行ずる人も稀な、すなわち顕密の行の廃れてしまった時代に、法然が悟りやすい念仏を弘めて、衆生利益のために、浄土宗を建立したことを挙げている点である。また、『古徳伝』では、

奇異の瑞相おほし 知ぬ 権化の再誕なりといふことを 昔世尊の誕生には珍妙の蓮 足を受けて七歩を行せしめ<sup>②</sup>

と、法然上人の誕生時に瑞相が起こったことを地理・歴史的に優れた他国の善例として、釈尊が降誕時にその御足を蓮の花が受けて、七歩歩んだことと同じであると、その尊さを現している。これらは、印度・中国・日本という地理的な、そして正法・像法・末法という三時説という尺度を用いながら、末法の日本に現れた、優れた仏教者としての法然像を提示しているのであり。相対的な価値判断として、同時代の日本の中で特に優れた僧侶として評価を行っているのである。ところが『四十八巻伝』になると、

抑上人は、美作国久米の南条稻岡庄の人なり。父は久米の押領使、漆の時国、母は秦氏なり。子なきことをなげきて、夫婦ころを一つにして仏神に祈申すに、秦氏、夢に剃刀をのむとみて、すなはち懷妊す。時国がいはいはく、「汝がはらめるところ、さだめてこれ男子にして、一朝の戒師たるべし」と。秦氏そのころ柔和にして身に苦痛なし。かたく酒肉五辛をたちて、三宝に帰する心深かりけり。つるに崇徳院の御宇、長承二年四月七日午の正中に、秦氏なやむ事なくして男子をうむ。時にあたりて紫雲天にそびく。館のうち家の西に、元、

二股にして末しげく、高き棕の木あり。白幡二流れ、飛び来たりて、その木末にかかれり。鈴鐸、天に響き、文彩日にかがやく。七日を経て、天に昇りて去りぬ。見聞の輩、奇異のおもひをなさずといふことなし。これより彼の木を、両幡の棕の木と名づく。星霜重なりて、かたふき倒れにたれど、異香、常に薰じ、奇瑞たゆることなし。ひと、これを崇めて、仏閣をたてて誕生寺と号し、影堂をつくりて念仏を修めせしむ。

と、印度や中国での教説や人物との関連性を述べることなく描かれている。すなわち美作の国で生まれたと言う地理的な説明と法然の両親が、子が無いことを嘆いて仏神に祈ったところ、剃刀を飲む夢を見て、懐妊し、それを聞いた時国が、「あなたが身ごもった子は男子であり、天皇一代に一人しか現れない師となる子である」と述べ、身を清らかに、三宝に帰して懐妊後の生活を送ったところ、紫雲が空にたなびき、白幡が二流れ、庭の棕の木に掛かり、鈴の音が聞こえ、美しい彩を見せながら、七日を過ぎて、天に昇っていつてしまった。そして年月を経て、その地が誕生寺となったとしている。このように『四十八巻伝』では、地理情報と奇瑞の事柄を載せるのみで、印度や釈尊のことは登場させずに、法然の尊崇性を表現しているのである。ここではその指摘のみに留め、何故そうであるのかについては後ほど考察を加えたいと思う。

## 二 自国の優位性

次に自国の文化の優位性を述べながら、祖師の尊崇性を述べる型について検討していきたいと思う。まず法然が比叡山に登るため母である秦氏と別れる場面についてである。『四十八巻伝』では、

母の所にゆきて、ことのよしを語る。兒童母儀をこしらへて曰く、「うけがたき人身をうけ、あひがたき仏教



にあふ。眼のまへの無常をみて、夢の中の栄耀をいとふべし。就中亡父の遺言、耳の底にとどまりて、心のうちにわすれず、はやく四明にのぼりて、すみやかに一乗をまなぶべし。但母よにいまさん程は、晨昏の礼をいたし、水菽の孝をつとむべしといへども、有為をいとひ無為にいるは、真実の報恩なりといへり、一端の離別をかなしみ、永日の悲歎をのこし給う事なかれ」と再三なぐさめ申す。母堂理に折れて承諾のことばを述べといへども、袖にあまる悲しみの涙、小児の黒髪を潤す。有為のならひ、忍びがたく、浮生のわかれ、惑ひやすくて、かくぞおもひ続ける。

かたみとてはかなきを親のとどめてしこのわかれさへまたいかにせん

と、勢至丸は母に対してこう述べる。この世に人間として生を受けるのも難しいことであるのに、出会うことが難しい仏教に出会うことができた。無常の出来事を目の当たりにし、はかない栄華を厭う。特に亡夫の遺言が心に留まって、早く比叡山に登って天台の勉強の道に進みたい。親への孝を尽くさねばならぬところであるが、僧侶の道を歩むことが真実の親孝行であるとし、母の気持ちを讀んだ歌で終わり、母と幼子との別れの辛さが説かれるのであるが、諸伝には他の表現が見られる。例えば『四巻伝』では、

まことにうめる子におしへらると 薩婆悉達の母の 御ために耶摩経をとき給けんも さこそと<sup>(13)</sup>

と、母との別れに際して、子に教えられたとする母が、釈尊が悟りを得て後、釈尊が生後七日で亡くなり、忉利天に昇っていた摩耶夫人のもとに赴き報告した内容を持つ『摩耶経』に、母である自己と法然との間に起きた、子から受ける教化の体験をなぞらえている。これは、釈尊が母のために摩耶経をといったことを引き合いに出し、子が母を教化したとする祖師の行業を讃えようとしているのである。『九巻伝』では、同様に『摩耶経』のことを取り上げるが、

母生まれる子にをしへられると 悉達太子母のために摩耶經を説き給けるも思なすらへつへし 小兒弁説をふるにつき 老母承諾するに似たれとも 有為の習忍び難く 浮世のわかれ迷ひやすく 昔の釈尊は衆生利益のために十九にして父の王に忍びて城をこえ檀特山にこもり給き 今の小童は 仏法習字のために 十五にて母儀をこしらへて家出比叡山にのほる<sup>1)</sup>

と、ここでは出家の時期を釈尊は十九歳で檀特山（釈尊の前身である須大拏太子が修行を積んだとされる山で、日本では悉達太子の修行場と言われる）で修行を積んだが、法然は十五歳で比叡山に登ったと讃えている。すなわち、印度の釈尊に比して、より若くして山に登った日本の法然は優れているとするのである。

また、『四巻伝』ではさらに、

三河の守大江定基（寂照）は 出家して大唐へわたり侍し時は老母にゆるさをこうむりてこそ 彼国にして円通大師の号をかうむり 本朝の名をもあけ給しか<sup>15)</sup>

と、平安時代中期の貴族大江定基、後の寂照が、母が恩愛の情を断ち許されて唐にわたり、大師号を賜ったことを挙げ、他国にも誇るべき日本人の活躍を挙げ、そのことと法然と母との別れをなぞらえ尊貴性を表現するのである。このように他の伝記では『四十八巻伝』には見られない日本の僧侶としての優位性を説く表現が見られるのである。

このような事例は高倉院受戒の場面にも見られる。『四巻伝』では、

高倉天皇御得戒侍けり その相承 釈尊千仏の大戒を持て正覚の暁 陳の南岳大師（慧思）にさつけ 南岳大師七代を経て道邃和尚 本朝伝教大師（最澄）にさつけ 慈覚大師（円仁）にさつけ 慈覚大師 慈覚大師清和天皇に授たてまつられしとき 男女受者五百余人利を得益をかふる 今当帝に十戒を授けたてまつらしめ給事 陳隋二代の国師天台大師の大極殿の御に対して仁王經を誦し給しに 殿上階下 称美讃嘆に殿かまひすし

く侍しかことく 月卿雲客より后妃采女に至るまで 巍々たる禁中に隅々たるいきさし 堂々たる宮人の面々たる信敬 もろこしのいにしへにもはちす やまとのなかごろをしたふ<sup>17)</sup>

と、印度の釈尊から、中国の南岳慧思、南岳大師七代、道邃、そして日本の最澄、円仁に伝えられた戒は、円仁より清和天皇に授けられた。その時に宮中の男女受者五百余人が受戒したのであり、日本に伝えられている戒の正統性と、日本における天皇への授戒の先行事例を挙げ、いま法然が高倉天皇に授戒することは、中国古代にも恥じない、円仁による日本の僧侶の王に対する授戒伝統に連なる素晴らしい営為と位置づけるのである。

ところが、『四十八巻伝』では、

高倉院御在位るとき 承安五年の春勅請ありしかは 主上に一乗円戒をさつけらたてまつらる<sup>18)</sup>

法然が授ける円頓戒について説明はなく、法然が授戒を行ったことを述べるばかりである。戒の正統性や、中国や日本における王への授戒の伝統を挙げるまでも無く、法然の尊崇性は伝わっていると伝記の作成者は判断し、印度・中国・日本の先行善例は取捨されていると考えられるのである。

### 三 超地理的表現

次に、超地理的表現の型について検討していく。そこで先ず取り上げるのが、二祖対面の場面についてである。

『醍醐本』には、こうある。

為<sub>レ</sub>他人<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>弘<sub>レ</sub>之 時機難<sub>レ</sub>叶故煩而眠夢中紫雲大聳覆<sub>二</sub>日本国<sub>一</sub> 從<sub>二</sub>雲中<sub>一</sub>出<sub>二</sub>無量光<sub>一</sub><sup>19)</sup>

とあり、二祖対面の場所は紫雲が日本国を覆うとあり、地理的な日本が意図されている。すなわち時代も国も隔た

り直接出会う機会を持ち得なかつた善導と法然との師資相承の場所として、夢中において日本にやつて来た善導という表現が用いられている。

それに対し『四十八巻伝』では、

上人ある夜夢見らく 一の大山あり その峯きはめてたかし 南北長遠にして西方にむかへり 山のふもとに大河あり 碧水北より出て 波浪南になかる 河原眇々として辺際なく 林樹茫々として限数をしらす 山の腹にのほりて はるかに西方を見たまへは 地よりかみ五丈はかりあかりて空中に一衆の紫雲あり この雲とひきたりて 上人の所にいたる希有の思いをなし給ところに、この紫雲の中より無量の光をだす。光のなかより、孔雀、鸚鵡等の百宝色の鳥とびいで、よみに散るじ、また河浜に遊戲す。身より光をはなちて照耀きはまりなし。その後、衆鳥とびのぼり手、本の如く紫雲のなかにいりぬ。この紫雲また北にむかひて山河をかくせり。かしこに往生人あるかと、思惟し給ほどに、又須臾にかへりきたりて、上人のまへに住す。やうやくひろごりて一天下におほふ。雲の中より一人の僧出で、上人の所にきたり住す。そのさま腰よりしもは金色にして、こしよりかみは墨染なり。上人、合掌低頭して申給はく、「これ、誰人にましますぞや」と。僧、答給はく、「我は是、善導なり」と。「何のために来給ぞや」と申たまうに、「汝、専修念仏をひろむること貴がゆへに来たれるなり」との給とみて夢さめぬ。画工乗台におほせて、ゆめに見るところを図せしむ<sup>20</sup>。

と、これはあまりにも著名な善導と法然の二祖対面の場面である。夢定中の眼前を覆う紫雲から、腰から下で金色その上は墨染めの衣を着た僧侶が現れ、法然が合掌低頭して「あなたは誰か」と尋ねると、「私は善導である」、「汝が専修念仏を広めることが尊いことであるから来たのだ」と述べる場面である。しかし、この『四十八巻伝』に説かれる場面では、紫雲が飛び来る場所は、『醍醐本』にあつたような日本ではなく、特定されていない。これ

は地理的な日本という場所よりも、抽象的な場所で弥陀の化身である善導と法然との聖なる対面が意図されているからだと思われるのである。

さらに法然のご病床時の場面には、興味深い編纂意図が反映されていく。例えば、『醍醐本』では、

上人語<sub>二</sub>弟子<sub>一</sub>云我本在天竺<sub>二</sub>交<sub>三</sub>声聞僧<sub>一</sub>常行<sub>二</sub>頭陀<sub>一</sub> 其後來<sub>二</sub>本国<sub>一</sub>入<sub>二</sub>天台宗<sub>一</sub> 又勸<sub>二</sub>念仏<sub>一</sub> 弟子問云可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>往<sub>二</sub>生極樂<sub>一</sub>哉 答云 我本在<sub>二</sub>極樂<sub>一</sub>之身可<sub>レ</sub>然<sub>〔2〕</sub>

と、法然が自分は前生において、印度で声聞僧として生涯を送り、今生では日本で天台宗に入り念仏を勧めたとして、弟子がこの度は極樂往生するののかの問いかけに対し、私は本来浄土に居たのだから当然そうであると述べたとしている。つまり、「(極樂浄土→)天竺声聞僧→日本天台→浄土宗(→極樂浄土)」という構造を持っている。この話は諸伝にも見られ、『私日記』では、

或時聖人相<sub>二</sub>語弟子<sub>一</sub>云我昔有<sub>二</sub>天竺<sub>一</sub>交<sub>三</sub>声聞僧<sub>一</sub>常行<sub>二</sub>頭陀<sub>一</sub>本者是有<sub>二</sub>極樂世界<sub>一</sub>今来于<sub>二</sub>日本国<sub>一</sub>学<sub>二</sub>天台宗<sub>一</sub><sub>〔22〕</sub>  
と、天竺で頭陀行に励んだと具体的な行動について触れ、『古徳伝』では、

我もと極樂にありし身なれば 定てかへりゆくへしと 或時又弟子に告て云我本天竺にありて 声聞僧に交て頭陀を行して化度せしめき 今粟散片州の堺に生を受て念仏宗を弘む 衆生化度のために此界にたひたひ来き<sub>〔23〕</sub>と、今生では粟散片州の堺(境)に、すなわち仏教的にも地理的にも劣った地域に生を受けて、念仏宗を弘めてきたと、対外意識について直接触れている。

しかし、それが『四十八巻伝』になると、

ある弟子 今度の御往生は 決定歟と たつね申に われもと極樂にありし身なれば さためてかへりゆくへしとのたまふ<sub>〔24〕</sub>

と、天竺僧や日本天台の僧としての活動は取捨され、自身が元來極樂にいたことのみが述べられており、今生での往生は間違いないと決定往生のみを強調する表現が用いられている。ここでの図式は、「極樂浄土↓浄土宗（↓極樂浄土）」となる。このように『四十八巻伝』では、印度・中国・日本という地理的内容よりも、極樂浄土⇄娑婆世界という、超地理的な表現を採用しているのか。つまり、対外觀が希薄になっているのは何故なのか。それは次に述べるように、『四十八巻伝』が、法然勢至応現説を基調として編纂されているからなのである。

#### 四 勢至菩薩応現説の意味

ここでは法然諸伝に見られる対外觀の変相、すなわち『四十八巻伝』ではなぜ対外觀が希薄になってしまうのかについて検討してみよう。それは結論を先取りしたが、『四十八巻伝』が、法然勢至応現説を基調として編纂されているからである。それは冒頭に述べられる編纂意図から読み取れるのであり、他の諸伝と比較することにより、その意図を鮮明に確認することができる。初めに取り上げる『四巻伝』の冒頭を見てみよう。

蓋以 三世に多の仏出給 若干の衆生をすくひまします 滅劫の千仏第四番 南州中印土浄飯王の御宇 癸（みずのえ）丑歳七月十五日 后の夢に金色天子 白像に乗て右脇に入給と見て 次年甲寅四月八日 仏出胎の時 宝蓮御足を承て 七步行給 偈曰 天上天下唯我独尊 三界皆苦我当安之 是震旦には周昭王 日本には彦波 草 不合尊八十三万四千三十六年甲寅相当 再往事を顧は悉達太子十九にして踰城 三十にして成道し給て 一代五時の説法しけしといへとも聞はきけとも達物はすくなく 伝ものはあれともさとれる物はまれなり 此故に末代の我等がために 阿難を唱導として 仏教を復せしむるに 面如「浄満月」 眼若「青蓮華」

仏法大海水 流入阿難心<sup>25</sup> 云々 生身の仏にかはらず 三十二相を具し 四弁八音あさやかにして弁泉露を洩さす 懸河早漲 これを梵王字を製して しな国は 漢明帝に 摩騰迦葉 法蘭 優陀王宮に現し給し白氎の仏像を迎たてまつるに仏像大光明をはなち給 永平七年甲申也 同十年丁卯白馬寺を立 然後四百八十余年すきて欽明天皇御時厩戸の王子壬申十月 百済国の聖明王 釈迦金銅像 經卷を奉<sup>レ</sup>送之刻 四天王寺を建立す それより以降 聖武天皇東大寺を鑄造して仏法興隆 粗如来在世にことならずして ややひさしくなりける いま先師上人念仏をすすめ給える由来を絵図にしるす事しかり<sup>(26)</sup>

ここでは、仏法東漸の歴史について述べられている。それは、阿難が唱導となつて釈尊亡き後の仏教を復興し、中国では後漢の明帝が「金人」を夢に見、使者を派遣して、仏像を迎え白馬寺を建立した伝承、また日本では欽明天皇の時代に、聖德太子が百済の聖明王から、金銅仏を賜り四天王寺を建立したこと、さらに聖武天皇が大仏を鑄造して東大寺を建立し、いまでも興隆し如来在世と変わらないという認識が述べられている。三国観を背景としながらも自国の仏教を積極的に評価している。

また、『古徳伝』には次のようにある。

伏以諸仏の世にいつる時をまち 機をはかる 時機それあひそむけは 感応もともあらはれかたし 進て故事をとふらへは 西天雲くらし 釈尊円寂の月とをくへたたる 退て当時をかへりみれは 東漸露暖なり 弥陀辺方の花匂を発す 彼在世の正機に漏たるはこれ恨なれとも 今滅後の遺法にあへる 又たれりとす 矧亦二尊の教門に入て一宗の正旨を得たり 仏恩肝に銘して報しかたく師孝源に還て謝しかたし 因茲にいささか其誉を述て 彼徳をあらわさん<sup>(26)</sup>

ここでは仏の出現する時を待ち、機をはかり、時期が背けば、感応することは難しいとし、時に釈尊から時代的

にも地理的にも離れるが、現在は日本に弥陀の教えの芳香が起こつていゝとする。釈尊の在世に見えることは無かつたが、遺法があり日本の人々にとつては、それで十分であるという認識である。釈迦弥陀の二門の教門に入つて一宗の宗旨を得、その仏恩と法然の徳に謝して、本書を著すとし、ここでも三国觀を背景としながらも、三時説を取りながら当時の日本の浄土宗の置かれた状況を肯定的に評価している。

さて、『四十八巻伝』では、どのように説かれてゐるだろうか。

夫以我が本師釈迦如来は あまねく流浪三界の迷徒をすくはむがために 深く平等一子の悲願をおこしますによりて 忽ちに無勝莊嚴の化をかくして かたじけなく娑婆濁悪の国に入り給しよりこのかた 非生に生を現して無有樹の花えみをふくみ 非滅に滅をとなへて 堅固林の風心をいたましむ 在世八十箇年 慈雲ひとしく群生におほひ 滅後二千余廻 法水なを三国に流る 教門しなことに利益これまぢまぢなり そのなかに聖道の一門は穢土にして自力をはげまし 濁世にありて得道を期す 但をそらくは とき澆季にをよひて二空の月くもりやすく ころの塵縁にはせてはせて三惡のほのをまぬかれかたし 煩惱具足の凡夫 順次に輪廻のさとを出ぬへきは たたこれ浄土の一門のみなり これにつきて諸家蘭菊をほしきままにすといへとも 唐朝の善導和尚 弥陀の化身としてひとり本願の深意をあらはし 我朝の法然上人、勢至の応現として、もはら称名の要行をひろめ給う。和漢国ことなれども、化導一致して、男女貴賤信心得やすく、紫雲異香往生の瑞すこぶるしげし、念仏弘通ここにもつともさかむなりとす しかるに上人遷化ののち 星霜ややつもれり 教誠のことは利益のあと人やうやくこれをそらんせず もししるして後代にとどめすは たれか賢をみてひとしからむことをおもひ 出離の要路あることを知らむ これによりてひろく前聞をとふらひ あまねく旧記をかんかへ まことをえらひ あやまりをたたして 粗始終の行状を録するところなり おろかなる人のさとよりやすく



見むものの信をすすめむかために 数軸の絵図にあらはして 万代の明鑑にそなふ 往生をこひねかはむ輩  
たれかこのころさしをよみせさらむ<sup>(27)</sup>

釈尊は八十年に亘り、この世での教導を行つたが、入滅から二千年が経ち、教えは印度・中国・日本に広まるも、教えや修行法は多種ある。聖道門は末法の穢土で自力の行を勧めて、得道を目指すが、それは末法に生きる者達には困難であり、末法に生きる煩惱具足の凡夫には、浄土一門のみが、輪廻を解脱する唯一の方法であるとし、その浄土門にしても、中国においては、唐の善導大師が阿弥陀仏の化身として、弥陀の深意を表し、日本においては法然が勢至菩薩の応現として、阿弥陀仏の勧める称名念仏の行を広めたのだとする。そして、中国と日本は国が異なるといつても、この阿弥陀仏の化身としての善導と勢至菩薩の応現としての法然の化導が一致し、分け隔てなく広く世の人々が信心を得やすいので、往生の瑞相を示す者が多く、念仏の弘通は、現在の日本において最も盛んであるとするのである。この釈尊の生涯↓仏法東漸↓聖道門・浄土門↓善導弥陀化身・法然勢至応現という序文に見られるように、『四十八巻伝』では、三時説、つまり末法の凡夫にとつての称名念仏が時機相応であるという教説に加え、それ以前の伝記の様に、三国観に基づき相対的な価値づけがなされたのではなく、善導弥陀化身説に対応する法然勢至応現説、すなわち法然は勢至菩薩の応現の化導であるからこそ、称名念仏が日本で盛んになるという絶対的な価値づけがなされるのである。

これまで見てきたように『四十八巻伝』以前の伝記では、対外観を前提として相対的に日本における優れた人格としての祖師の価値を想定している。法然勢至応現説に依拠した仏格としての祖師の価値が説かれることによって、日本独自の絶対的な価値を持つ祖師の尊崇性を明確に示しているのである。

おわりに

ここまで、諸伝における対外観をもとにした法然評価の三つの型、即ち一つには他国優位型、二つには自国優位型、三つには超地理的優位型の考察を行った。その結果、『四十八巻伝』以前の諸伝においては、対外観を前提として、相対的な価値として日本において優れた祖師である法然像が提示されているということである。そして、『四十八巻伝』においては、対外意識が希薄化していることを指摘した。そして、その理由が『四十八巻伝』における、法然勢至菩薩応現説に依拠した仏格としての祖師が説かれる点にあることを指摘した。

全体としては、『法然上人行状絵図』では、時機相応という意味での積極的な価値づけ以外、三国の地理、三時説の歴史的理由による消極的な位置づけは見られない。むしろ、弥陀化身の善導と勢至応現の法然を踏まえた、二祖対面や、病床のやり取りに見られる超地理的表現に、その基調を見ることができるのである。

日本仏教は常に対外観を意識しながら展開してきた。それは地理的にも時代的にも、印度から遠く離れ、釈尊滅後から時代を経た国で行われる仏教だからである。特に中世法然伝の編纂された時代は、まさに末法という仏教の危機意識が叫ばれていた。その地理・時代状況の中で伝記作者は、法然の尊崇性を説かねばならなかったのである。

すなわち『四十八巻伝』以前の諸伝では、時期相応の称名念仏の教行を広めた、異国に比べても劣らない優れた日本の祖師の相対的な価値を積極的に説こうとした。そして、『四十八巻伝』では、時機相応説に加えて、法然勢至菩薩応現説を全体の構想の中に組み入れ、絶対的な価値を説くことによって、その後六百年間、そして現在も影

響力を有する伝記となったのである。今回明らかにできなかった諸点を今後の課題として研究を進めていきたい。

## 註

(1) 中世法然上人伝研究として、田村円澄『法然上人伝の研究』（法蔵館、一九五六）、成田俊治「中世における法然研究」（『佛教大学研究紀要』三八、一九六〇）、井川定慶編『法然上人伝の成立史的研究』（臨川書店、一九六一）、中井真孝「絵伝にみる法然上人の生涯」（法蔵館、二〇一一）が挙げられよう。近年の中世法然伝研究の成果としては、中井真孝氏が『源空上人私日記』について、源智系の『醍醐本』所収「一期物語」と、『四巻伝』との合糅したものであると、内容の検討から明らかにしている。近世法然上人伝研究としては、平祐史「近世における法然伝研究の動向——『円光大師行状絵図翼賛』編纂者の学風」（『佛教大学研究紀要』三八、一九六〇）。近代法然上人伝研究としては、峰島旭雄・芹川博通編著『近代の法然論』（みくに書房、一九八二）などが挙げられよう。

(2) 「現存する法然伝によって、歴史的な法然像を追及することは不可能に近い。なぜなら、これら幾多の法然伝の原形となった『源空上人私日記』が、宗教者また救済者としての法然を描きはしたが、しかし歴史的な法然を描く試みを、最初から放棄したからである。従って史実の立場からすれば、『源空上人私日記』以降において加えられた法然像の修飾は、ほとんど無価値に等しいのである」（田村円澄『法然上人伝の研究』、一九五六年、法蔵館）。田村氏のこの主張は、近代以降の実証主義的な歴史研究者の基本的な態度であり、それにより史実と修飾との区別が多く行われてきた。

(3) 以下拙稿。「九条家の信仰世界（二）——帰依これふかし尊崇尤切也——」（『佛教論叢』四九 平成一七年三月）、「九条兼実の見た頭光踏蓮の法然上人について」（『浄土学』四四、二〇〇七年）、「隆円書写『円光大師御伝書』につい

て」(『佛教論叢』五二号、二〇〇八年)、「明治期における法然上人像の変容―植村正久「黒谷の上人」をめぐる」(『教化研究』二一〇、浄土宗総合研究所、二〇〇九年)、「明治時代後期の法然上人像―諸伝記における採話傾向をめぐる」(『教化研究』二二、浄土宗総合研究所、二〇一〇年)、「近代における法然像―明治四十四年法然上人七百年御忌をめぐって」(『法然仏教とその可能性』、佛教大学総合研究所、二〇一二年)、「明治時代後期における祖師顕彰―円光大師十徳」をめぐる」(『現代社会と法然浄土教』浄土宗総合研究所、二〇一三年)、「近世末の法然伝―法州・法道『御伝撮要講説』を中心に―」(『法然仏教の諸相』法蔵館、二〇一四年)、「勢至菩薩の示現としての法然―近世浄土宗忍漱・義山の伝記研究」(『カミと人と死者』岩田書院、二〇一五年)

- (4) 対外意識に関する研究には高木豊「鎌倉仏教における歴史の構想」(『鎌倉仏教史研究』、岩波書店、一九八二年)。  
村井章介『アジアの中の中世日本』(校倉書房、一九八八年)。拙稿「慶政における偽悪・出奔と禪受容の特質―『摩訶止観』と『禪宗の書』」(『日本思想史研究』三二、二〇〇〇年)。

市川浩史『日本中世の歴史意識 三国・末法・日本』(法蔵館、二〇〇五年)。前田雅之「三国観」(小峯和明編『今昔物語集を読む』、吉川弘文館、二〇〇八年)。佐藤弘夫「本地垂迹説の世界観」(『日本の対外関係 三 通行通商圏の拡大』、吉川弘文館、二〇一〇年)等がある。

- (5) 『九卷伝』

- (6) 『法然上人行状絵図』

- (7) 『法然上人行状絵図』

- (8) 『四卷伝』。「仏言。仏子。若自殺教人殺方便讀<sub>レ</sub>歎殺見<sub>レ</sub>作隨喜。乃至呪殺。殺因殺縁殺法殺業。乃至一切有命者不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>故殺<sub>一</sub>」(『梵網經』、『大正蔵』二四、一〇〇四頁)

(9) 『九卷伝』「爾時魚跳。我以小杖打魚頭。以是因縁。墮地獄中。無數千歳。我今雖得阿惟三仏。由是殘縁故。毘樓勒王。伐釈種時。我得頭痛」(『興起行経』上、『大正蔵』四、一六六頁)「我爾時以貧患故。撲殺此力士。以是因縁。墮地獄中。焼煮榜治。経数千歳。今我已成阿惟三仏。諸漏已尽。爾時殘縁。今故有此脊痛之患」(同、同、一六七頁)

(10) 『弘願本』

(11) 勝如は勝尾寺(大阪府箕面市)に住した平安時代の僧侶。無言の行を貫いたが、念仏により往生した教信と夢中で逢い、その後、念仏を称え往生した。この話は、『日本往生極楽記』、『平家物語』に説かれ、中世の説話集などでは、理想的な遁世者の一人として描かれている。

(12) 『古徳伝』

(13) 『四卷伝』

(14) 『九卷伝』

(15) 『四卷伝』

(16) 『今昔物語集』(卷一九―二)

(17) 『四卷伝』

(18) 『法然上人行状絵図』

(19) 『醍醐本』

(20) 『法然上人行状絵図』

(21) 『醍醐本』

(22) 『私日記』

(23) 『古徳伝』

(24) 『法然上人行状絵図』

(25) 『四巻伝』

(26) 『古徳伝』

(27) 『法然上人行状絵図』